
リンクエイジ

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンクエイジ

【Nコード】

N5436Z

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

人間の心の中の世界で、二つの軍隊が競いあっていた。人間の心を守るカオス軍、人間の心を巣くうソーサラー軍。

この物語りは若きカオス予備軍の話だった。

リンクエイジ

「さて、俺達は何処へ行くのやら」「俺は……………いずれ親父と決着を着けなくては。ナゼ、カオス軍がソーサラーに寝返ったのか。それだけだ」「私は……………人の心を守りたい。無謀な事かも知れないけど、一人でも多く救いたい。ただそれだけ」「俺は……………この世界と人間の世界の行く末が見たい。その為に前線に立たなくてはいいけないんだ。列もみずほも意見は違うがたどり着く先は一緒だ。違うか？」「そうかもね。後は……………愛しのダーリンと……………」
「オッ……………俺は認めないからな！もっと巨乳が良いんだから」「悪かったわね。貧乳で！」「ウワウワー……………ギブ！ギブアップ」「フフン。見たか！みずほ様のバカ力！見くびんなよ！」「お前たち……………暴れるな。後で父上に怒られるのは俺なんだから」

「ありがとよ。パトリック。お陰で楽になったよ。んじゃーな」

「ネーネー列。これからどうする？まだお昼よ」「ン？もちろん昼寝！」「ハーッ？ナニソレ！アノゝさ……………私も暇なんだよねー。ダーリン君。例えば……………遊園地とかー、お買い物とかさ。あるじゃない？」「ウム……………無い。無いな。ハハハハッ」

ドッカーン！

爆風の衝撃が走る。

「ナッ……………なんだ？テロか？行こう！みずほ！」「エッ……………
エエ。……………良いとこだったのになー。なんでコウなるの？」「何事
だ！列！凄まじい衝撃だったぞ」

見るとビルの合間に人だけが出ていた。

「あそこだ！行くぞ！」

爆破されたビルの上空を一人の男が浮かんでいた。「あれは……………
エドワード。エドワード・スカイ。治療できたのか」「スーッ……………
…ストッ……………オヤオヤ、カオス予備軍の諸君。ごきげんよう」「
エドワード！治ったのか？」「アア、南条 列 先輩。全てわかつた。
私の道が間違っていた事も。私の故郷を滅ぼしたのはカオス軍。
彼等が弱すぎたから滅んだのだ。もう迷わない。俺はソーサラー軍
三等兵。エドワード・スカイ。またの名を、忍者 カゲツ。以後、
お見知り受けを」「なんだと！血迷ったか！エドワード！」「パトリック・
レドガー 先輩。貴方には感謝してますよ。ハーツ……………
…最高だ！この力。エネルギーが満ちてゆく。これがソーサラーか。

素晴らしい」「エドワード！戻ってこい！君は間違えている！」「手放せませんよ。私の過去は。貴殿方との会話は最後にしましょう。次は人間の心の世界でお待ちしてますよ。健闘を期待していますから。それじゃー」

「……………エドワード……………ナゼ」「列。弱すぎたのはエドワードの精神力だ。……………彼は、ソーサラーに落ちた。今後は敵だ」「ソッ……………そんなー……………バカな」「行きましょう。列。パトリック。ここには何も無いわ。何も……………」

三人は絶望の中、エドワードが飛び立つ姿を見た。

「オヤジー！スパイダー！許さん！絶対にたどり着いてみせる。お前が土下座するその日まで！」

「列。また会えたな」「お前は……………シルバーオックス。兄さん」「お前に話さなくてはいけない事がある。俺達兄弟に関わる話だ。良いか？二人で」「構わないよ。どうせ暇だもん」「着いてこい。列」

「アリヤツ…………ダーリンは？ネエ、パトリック。列、みなかつた？」「イヤ。知らんが」

列とシルバークスは霧の中に消えた

リンクエイジ その2

「素晴らしいデモンストレーションだったよ。エドワード君」「これからですよ。鴉様。忙しくなりそうですね」「退屈よりは良いであろっ」

「列、話がある。着いてこい」「兄さん。シルバーオックス」

「兄さん……………この前はありがとう。なんとか無事に帰れたよ」
「列。なぜ今になってお前に会いたくなったかわかるか?」「……………
…なんでだろう。スパイダーが動きだしたとか?」「それもある。
だが、肝心なのは今後の話だ。俺が表れた以上、連中の攻撃も激化するだろう。はっきり言おう。昨日の攻撃はお前を捕らえに来たのだよ。奴等が欲しいのは人間の心では無い。それに気づいて介入した。それだけだ」「なぜ、僕を捕らえに?」「気が熟したからだ。スパイダーとて永遠に権力を保つ事は出来ない。だから後継者が必要なのだ。ソーサラーの血が流れる俺達ならその王座に相応しい。たまたまそんな星の元に生まれたのだ。我々は。つまりお前が捕らわれたら俺も都合が悪い」「1つ聞いて良いかな? 兄さんは今まで何処にいたんだ?」「知りたいか? 後には引けないぞ」「構わない俺は決めてるんだ。必ず父さんにたどり着くと。俺達双子を捨ててソーサラー軍に寝返った父さんに!」「……………そうか。安心した俺は見ていた。お前たちの行く末を。お前の影となり、常に見てい

た。決して表に出ること無く、深い影の底で見ている。お前を力オス予備軍に導いたのは俺だ。その先に父親や宿命がある」「……………そうだったのか。俺の辛さや苦痛。その全てを一人で受け止めていたのか？兄さん」「慣れている。それを糧に育ててきた」「兄さんモ力オス予備軍なの？」「そう言われる覚えは無い。初めてだ。影の宿命だな。俺はそれに従っただけ」「グスン……………ありがとう。兄さん。貴方がいなかったら僕はここにはいなかった。不思議だったんだ。僕の父親がスパイダーだと知った時、痛みは無かったんだ。なぜか。……………一緒に来てくれないか？皆に紹介したいんだ」「照れ臭いな。俺が見ていたと聞いて怒る奴はいないか？」「関係無いよ。そんなやつ俺が殴ってやるって。スカーンと。行こうよ」「……………そうだな。いつかは話さなくてはいけないんだ。今であろうと何時になろうと。我々、影の軍隊に対してな。案内しろ。列」

「オーイ！パトリック！みずほ！」「列？貴方、何処に行ってたの？」「ン？新しい仲間の所さ。紹介するぜ！ジャーン！南条 隼人さんだ」「隼人？ダレ？」「ウオッホン。エー……………俺の双子の兄さんさ」「カツカツカツ……………また会ったな。シルバーオックス。あの日は世話になった」「構わないさ。パトリック。それにみずほ。デカく遅くなったな。俺は列の影となり、お前たちを見ていた。れっきとした力オス軍になるように誘導したのは私だ」「要するに私たちの先輩ね。宜しくお願いしますわ」「南条 隼人。今後の事を考えると敵は作りたく無い。俺達に協力してくれないか。頼む」「そのつもりだパトリック。都合が良いだろう。お前たちを知っている男が側にいると」「アノッサー……………私、列のダーリンで良いのかな？隼人さん」「知らん。勝手にやれ」「ヨッシャー！エドワ

ードの代わりだ！見てろよ！。エドワード・スカイ！お前の選んだ道が間違えていたと俺達が証明してやつから！」

次の日、南条 隼人は学園長の部屋にいた。

「おひさしぶりです。園長。南条 隼人。シルバーオックス。ただ今、戻りました」「ウム。南条 隼人。南条 列の双子の兄よ。これよりカオス予備軍として迎え入れる。サア、仲間の元へ行け。新生カオス予備軍の元に」「ありがとうございます。必ずや彼等を導いてみせます」「頼んだぞ。シルバーオックス」

絶望の中、シルバーオックスはカオス予備軍に加わった。新たな仲間を得た四人はグラウンドを走っていた。

目を細め煙草に火を灯す学園長。「良かった。これで。さて、ハードポインターの準備をしないとな」

続く

リンクエイジ その3

「学園長。ハードポインターの装着が完了しました」「ウム。彼等
を呼んでくれ」「失礼します」

学園長に呼び出される四人。

「君達には特殊任務について貰う。来なさい」格納庫に行く四人。

「なんだ？コレ？俺のマシンが」「知っているかね？ハードポイン
ターだ。別名、特殊武装。重甲武装とも言うが。これからは風当た
りも厳しくなる。本校も対策を練らなくてはいかん。そこでだ、急
遽、入荷を急がせた。開発中のマシンさ。南条 列。及び、南条
隼人。君達にはこの攻撃力を強化したドリルプレッシャー。パトリ
ック・レドガー。君には偵察力を強化したこの、スカイプレッシャ
ー。祐希 みずほ。君には奇襲攻撃に特化したマリンプレッシャー。
各々、専門ジャンルの違うマシンを本日より、使用する」「スツゲ
ー！ドリルプレッシャーか？この光沢。新品の匂い。ハーッ………
たまらんなー」「これが俺の相棒か？小回りが効いて悪くないな」
「素晴らしい。このモニター。いよいよ俺も空を飛ぶか」「何よ！
このカラーリング。私はね、ピンクちゃんに決まっただから！中
は意外と狭いのね。色は後で塗り替えよう。お菓子入るかしら？」

「それとだ、救護班が必要になるだろう？入って来なさい」「……ヒョコッ……スノ」「あんたは……確かー。スノちゃん？」
「スノー！おひさしぶりですのー。ブイツ」「……ハーツ。参ったぜ。ブイツを覚えたか？このガキ」「ピビーツ！コーラー！こう見えても成人でスノよ！ピビーツ！マチナサーイ……スノ」「賑やかになりそうね。隼人さん」「良いんじゃないか？我々には無いキャラクターで。列も大変だな。あんなチビツ子に振り回されて」「かも知れないですね。隼人さん。チームプレーとは料理の様な物ですから。スパイス、食材、タイミング、技術。その4つのベクトルが揃わないと旨さが出ない。だから人は人を求める。そうでしょう？」「パトリック。良いことを言うな。その通りだ。あのスノちゃんもアクセントにはなる。だから入れたんだろう。救護班兼ムードメーカーだ。良い選択だな」「私も取られない様にしないとね。負けないんだから！ちよつと列！マチナサーイ」「……わからん。恋敵と言う者はあんなチビツ子でもなるのか？」「サア。みずほは真っ直ぐだから。一度ターゲットを捕らえると離さない。それが仇でしょっちゅう別れてるがな」

「ザーザー……諸君。おはよう。私だよ。エドワード・スカイだ」「ナッ……なんだと！園長！このセキュリティはどうなってる？」「完璧だが。彼はカオス予備軍だった男だ」「……何の用だ！悪党！」「アー！君！困りますの。お薬の時間でスノ」「心配ない。今回だけの特別サービスだ。南条 列。いや、烈火のシャクヤ。君に挑戦状を届けに来た。明朝、未明。私とゲームをして欲しい。無論、一人でな。来なければ人間の心は頂いた。簡単な

ゲームさ。陣取りゲーム。知っているよね？それではご機嫌よう」

「カオス予備軍に介入なんて！舐めた真似を！」「列！落ち着け！
罨だ」「陣取りゲームか。つまりお互いにカードを出しあつて強い
カードが陣地を広げられる。囲碁の様な物か」「ゲームですの？楽
しそうですの！」「一体何を考えてるの？エドワード。一人づつ呼
び出すつもり？」「みずほ。おそらくその通りだ。次から次に果た
し合いをやる。列。兄弟からの忠告だ。今回は見合わせ。敵の出方
がわからないんだ。それより新しくなったこのマシンに慣れる。長
期的に見て今すべきテーマだと思うが。エドワードはその後でも遅
くは無い。そう思わんか？」「そうよ。実際このチームだつてうま
いくかわからないんだしね。試してみないと」「マシンの具合にチ
ームの調整か。列。いずれやることになる。だが、それは俺達とし
てだ。お前一人では行かせん！どうでしょう？学園長」「ウム。ま
だ奴は何もしていない。訓練を許可しよう」

続く

リンクエイジ その4

「兄さん。宜しくお願いします」「アア。あくまでも肩慣らしだ。マシンの具合を見たいからな」「スカイプレッシャー。出撃準備完了」「こっちもオツケーよ」「ソウルゲート！オープン！行くぞ！皆」

四機のマシンは人間の精神の世界に飛び立つ。

「烈火のシャクヤ様。おはようございます。今回はデモンストレーションです。お間違いありませんね」「ウン。皆、マシンの具合はどうだ？」「快適だ。素晴らしい」「こちらスカイプレッシャー。鋼のトウゴウ。偵察システム、分析システム、共に異常なし」「水虎のキョウカ。マリンプレッシャー。こちらも安定してるわ」「ヨシ。俺と兄さんで先行する。キョウカは後に続け。トウゴウは最後列から指示を」「わかった。トライアングル フォーメーションだな」「全体の指揮を高める良い陣形ね。アッウーン！さすがダーリン」「ザーザーッ……………スノ、スノ……………聞こえますの！パルスのバランスも最高ですよ！」「キーン……………聞こえてるよ。スノちゃん。もう少し静かに頼めない？」「出来ますの！了解ですの！ブイツ」「シャクヤ。その……………スノとかブイツとか……………なんとからんか？」「学園長。偵察機の具合が見たい。ダミーを射出してください」「わかった。君達のレベルに合わせたターゲットを準備してある。今、射出する」

「スカイプレッシャー。目標を捕捉した。スカウター偵察機、射出」

ヒュンヒュン。

二機のスカウターがスカイプレッシャーから飛び立つ。

「モクヒョウ、トラエタ、ザヒョウ、オクル」機械音が鳴り響き、四人に座標が送られる。

「学園長。その偵察機は敵に見つかる事はないのか」「心配ない。ステルス機能付きだ」「なら、先回りされる心配は無いな。便利な物だ」

「烈火のシャクヤ。目標を捕らえました。左に三機。右に一機。左から狙う」「なら俺は援護する。皆、左に旋回しろ。トウゴウは後ろに気を付けて」シャクヤはミサイルのトリガーを引いた。

ズガッガッガッガッ

ダウン！ダウン！

「オシッ！二機撃破！」

ダスッダスッ

ダウン！

「シルバーオックス。一機撃破。簡単な任務だ」「援軍襲来！距離5000。左から来る」スカイプレッシャーが援軍を確認する。「オッケー！私に任せなさい！マリンプレッシャー。ファンネル射出！」

ズバッバッバッヒューン

マリンプレッシャーの後部が羽の様に展開し、追尾メカが射出される。

ドスツドスツドスツ

追尾メカが目標を爆破する。

「追尾メカかあ。良いなあ。アレ」「シャクヤ！来るぞ！左！」「へっ？左？」

バスッバスッ

キツキキ「アブねえ！ヒュー間一髪。まだ残ってたのか増援」「気を抜くな。シャクヤ。任務は無事に終わる事だ」「だいぶ慣れてきたな。この操縦。ヨシ！俺一人で突っ込む！援護しろ！」「フォーメーションを崩すな！シャクヤ！」「わかってらー！ウォーッ！」

シャクヤはダミーに突進した。「あのバカッ！キョウカ。距離を詰める！俺と一列になれ。守りを固めつつ援護する」

ズガッガッガッガッ

シャクヤがダミーを撃ち落とす。

「へへッ！どうだ！見たか」「調子に乗るな！シャクヤ！下がれ！」「エッ？もう終わり？つまんねーの……………」「更に増援！次は突進するなよ。シャクヤ」「……………わかったよ。戻る」「それで良い。シャクヤ。一本の矢は折れやすい。四本の矢ならある程度の衝撃に耐えられる。それが絆だ。スパイダーにしてもエドワードにしてもそれを知らない。絆は無限の力になる。だが、無限イコール0にもなるのだ。来るぞ！援軍」「ありがとう。兄さん。皆、行くよ。ゴメン。俺は……………一人じゃ無い。無かったんだ」

「なんだ？あの大軍。園長の野郎！トウゴウ数は？」「500。いや、もしかしたらそれ以上」「ヤッベーじゃん。怒らせたかな？さつき。こりゃー追試だな」「どつするの。まともにやり合ったら負けよ」「俺にサクがある。皆、着いてこい。後退するぞ。敵に背を向けるな」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5436z/>

リンクエイジ

2011年12月21日11時51分発行